第4章　考　　察

1　車塚考証

池田 正男

はじめに

雲部車塚古墳（以下「車塚」）の所在する篠山市は、昔から歴史研究の盛んな土地柄である。福原潜次郎（会下山人）氏[註1]、奥田常造（楽々斎）氏[註2]などの郷土史研究者や、多紀史蹟研究会[註3]、多紀文化顕彰会といった研究会が組織され、おもに郷土史研究に取り組んでいる〔池田 2003〕。

車塚について、江戸時代以後どのように考証されてきたか、粗描していきたい。

（1） 車塚は牛の車

車塚に関する記述が文献にあらわれるのは、江戸時代の郷土誌『篠山領地誌（一名貞享記）』[註4]、『丹波志』[註5]、『封彊誌』[註6]、『多紀郡明細記』[註7]である。車塚にかかわる文章の冒頭は、按察大納言源資賢（みなものとすけかた）卿云々ではじまり、車塚とおぼしき記述に続くのである。

たとえば、『篠山領地志』は、「按察使大納言助方（筆者註：資賢の誤り）謫居の遺跡、車山と云ふ、形円にして高さ丈余、四方に隍有り、中に東に向て牛の形に象れる小山あり、牛山と名づく、後ろに車輪に類せる塚、南北に対峙せるあり、車塚と号す、宛ら牛の車を引くが如し」と。

『多紀郡明細記』では、「里人云、按察使大納言資方卿、京の乱を避け、爰に来り給ふ、故に土地牛車の形に築き、邸を営み□□、西方を牛の後への方とし、東を牛の頭とす。（略）岡と池との間の麓の回り水の滸に壷あり、各大概底なし、縁なき釜の如し、一処に二つ三つ、かさなり埋もるもあり」と。

このような例から理解されるように、車塚は源資賢の邸跡として書かれている。

この源資賢の都落ちについては、1179（治承4）年11月、平清盛のクーデターによって後白河法皇の近臣であった大納言源資賢が官を解かれ、関外に追放されて「彼大江山や、いく野の道にかかりつつ、丹波国村雲と云所にぞしばしばやすらひ給ける。其より遂には尋出されて、信濃国とぞ聞えし」と、「平家物語 三の巻 大臣流罪」に記されている。

けれども、源資賢が篠山の村雲[註8]に居を構えたことについては何も伝説などはなく、郷土の歴史書にも書かれていない。また、発掘後の車塚にかかわる文献には、墳丘上に邸跡の存在を示す記述はない。

村雲という地名は、1888（明治21）年の町村名改正後、復活した村名に村雲村がある。車塚は村雲村の東本荘村字城山の坪、車塚の坪に所在するところから、「平家物語」の丹波国村雲は車塚のある村雲と理解することは可能である。源資賢の邸跡と車塚がどのような歴史的背景があって結びついたのか不明である。このことについては、車塚に関する文章は、信じるに値すると思われる。

これらの歴史書から、江戸時代には車塚の後円部を「車山」、前方部を「牛山」と呼び、2基の現存する陪塚を「車塚」と呼び、牛車のイメージで呼称していたこと、埴輪が墳丘裾の水際に近いところにあったことがわかる。

（2） 車塚は何人の墓か

1896（明治29）年5月19日、八木奘三郎氏[註9]が車塚をみて、「墳形を案じて、二千年前の墓制にて、御

陵か、否らざれば、皇族方の墳墓ならん」と村長木戸勇助氏（以下「木戸村長」）註10、総代木戸正寿郎氏に所見を述べたことに対して、両者が車塚は何人の墓か、皇族方の墓か否かの解答を得るため、発掘を実施した。

八木奘三郎氏は、車塚が御陵墓参考地に治定された後の1901（明治34）年12月「丹波国多紀郡雲部村の古墳発見品」〔八木1901〕と題して「此古墳は石棺等の構造と云ひ、遺物の形状と云ひ、共に類例少なき方にて、古墳時代の研究者に取りては、興味の津々たるを覚ゆるなり」と報告をしている。考古学者としての見解は何も述べていない。また、その後も車塚についてまったく触れることなく生涯を送った。

発掘後、車塚に関して最初に考えを発表したのは栗林貞清氏（以下「栗林氏」）註11である。

栗林氏は1897（明治30）年８月15日、青年大会において「車塚の話」註12と題して講話をおこなっている。栗林氏は蒲生君平の『山陵志』の説をふまえ、以下のように推理する。

山稜は山を利用して築き、前方後円にして、３段に整え、後円部の下に石室を設け、棺を置き、金銀勾玉剣甲をおさめている。墳丘には埴輪を立てめぐらし、周囲に池溝を掘ったものをいい、後世これを車塚と称した。このような同じ様式をもつことを車塚陵制という。

前方後円の車塚陵制は第９代開化天皇陵にはじまり、第11代垂仁天皇陵でその制度が完成し、第30代敏達天皇陵までの23陵の制度はほぼ同じである。そして、第31代用明天皇陵以後は円墳である。このことから、車塚の築造年代は第９代開化天皇から第31代用明天皇以前となる。

次に、「世の学者の説に、丹朱なるものは、我国往古外交の始まりしより舶来したるものにて、其の以前には、赤土、白土等を以って塗りたるものなりと言う。我国の航海外交の始まりしは、垂仁天皇の末年、景行天皇の始なり」註13として、車塚の石槨に塗布された赤色は赤土であることから、車塚は第９代開化天皇以後、第12代景行天皇以前に築造されたと推察する。

続いて、『古事記』、『日本書紀』（以下『記・紀』）の第11代垂仁天皇の32年７月、皇后日葉酢媛命（ひばすひめのみこと）が薨じられた際、野見宿禰の奏請により、殉死者にかわって、埴土を用いて人や馬および種々のもののかたちをつくり、「以後、この土物を樹て、人を傷るなかれ」註14と埴輪のつくり出された話がある。

これを根拠に、垂仁天皇32年以後の陵墓には必ず埴輪が樹立されたが、車塚には埴輪が一つもないところから（筆者註：車塚から埴輪は出土している）、第11代垂仁天皇の始より同32年７月に至る31年間において築造されたとする結論を導き出した。

車塚の被葬者について、『記・紀』の第９代開化天皇の条に、開化天皇は「旦波の大県主、名は由碁理（ゆごり）の女、竹野比賣（たかのひめ）を娶して、生みませる御子、比古由牟須美命（ひこゆむすみのみこと）」とあり、栗林氏は大県主の住居地は、車塚の所在する東本荘の北に位置する、現在の県守と推定する。県守の守は、主と古来通じて用いる文字であるから、県主の古名が存在するものと理解する。県守に所在する古墳を、ユゴリ塚註15といい、墳形は前方後円墳であるところから、車塚陵制時代に築かれた古墳である。これは、県主の住んでいた土地にあるところから、ユゴリ塚は旦波の大県主ユゴリの墳墓であると断言する。

そして、比古由牟須美命は第10代崇神天皇の御異母兄であり、丹波比古多多須美知能宇斯王（たにはのひこたたすみちのうしのおう）を生んだ。後に丹波比古多多須美知能宇斯王に漢字をあてて、道主王とする。『日本書紀』崇神天皇の10年７月の条に、四道将軍を置かれ、同年９月、「大彦命を北陸に遣わし、武渟川別を東海に遣わし、吉備津彦を西道に遣わし、丹波道主命を丹波に遣わした」。そして、11年４月、四道将軍は夷賊を平定したことを奏上したと伝えている。

よって、被葬者は丹波に派遣された四道将軍丹波道主命であろうと結論づけた。

1909（明治41）年５月28日、宮内省諸陵寮京都出張所主任増田于信氏（以下「増田主任」）が雲部村に出張して調査した結果について木戸村長に話した内容を、高家正一氏が増田主任の言葉として書き綴っている。

高家正一氏著『四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記』註16により引用する。

「丹波道主命の御娘御子に亘らせらるる、竹野媛と仰せられるがありて、夫れより考えるに、車塚前方の川を高野川と呼び、その源をタカノと称していることより考え、さらに車塚の後方の姫塚あるによって、推するに、四道将軍の丹波道主命の御陵墓か、さもなくば高野姫の墳墓であろう。

また、丹後の海岸に竹野郡と云ふありその所に（略）古墳がある由。竹野郡は、韻「タカノ」と相通じている。殊に昔は丹後も、同じく丹波国にてありしことは、和銅６年に、丹波の内５郡を割いて、丹後国起したるものにして。竹野郡は、海岸にあるだけに、今の丹波よりも早く開化したに相違なしとすれば此点より見るに、竹野郡の古墳（筆者註：神明山古墳）が何か丹波道主命に因縁あるものではあるまいかと思われる。

もし、古墳の調査を進める事とし若し又右の古墳が何等の意味なきものとするならば、車塚をもって丹波道主命の御陵墓とし、姫塚を以って、高野媛の御墳墓とし、県守村にあるイモリ塚「ユゴリ塚」は、御祖父由碁理の命の御墳墓と確定するより外仕方なきものと考える云々」と。

そして、増田主任は「諸陵寮に於いては、目下丹後竹野郡の古墳、調査中の由、其の調査が終結すれが、更に確たる伝達を得る事と思う」と記されている。

その後、増田主任は1909（明治42）年６月24日、1910（明治43）年４月21日、宮内省諸陵頭山口鋭之助氏ほかと御用係として随行し、車塚を視察している。用向きは濠内の浚渫などにかかわることであり、車塚と丹波道主命との見解について触れていない註17。

しかし、増田主任は1910（明治43）年６月29日から７月２日、丹後地域を訪れ、神明山古墳およびその付近の状況、古文書などの調査をおこなった。その時随行した竹野郡書記小倉瀧蔵氏は、増田主任の所見を復命に「竹野村神明山は、丹波道主命か彦坐王か、又は竹野之波津羅別王かの、御三方の内の一ならんと思はる」註18と記している。

その後、丹波道主命の陵墓を車塚・神明山古墳のどちらに確定したか、明らかでない。

神明山古墳は、1923（大正12）年３月７日付、官報第3178号により史蹟指定された。

このように、“車塚は誰の墓か”の解答を求めて、宮内省の諸陵助、郷土史家が頭を悩ましているとき、旧丹波国の多紀郡、旧丹後国の竹野郡において、丹波道主命を奉る神社創立の機運が芽生えてくる。多紀郡（現・篠山市）では、1900（明治33）年１月、丹波道主命の神霊を奉る丹波神社創立に向けて会が結成された註19。竹野郡（現・京丹後市）は、1923（大正12）年３月、「丹波道主命奉斎官社地ノ請願書」を郡内村長名で帝国議会に請願をしている註20。両者ともに神社創立には至らなかった。

昭和の時代に入ると、篠山においては1935（昭和10）年５月、多紀郡町村長会と多紀史蹟研究会（代表奥田常造氏･顧問福原潜次郎氏）は、宮内大臣宛に車塚に関する考証文を作成して、丹波道主命の「御陵墓御治定」を請願した。その請願書に多紀郡町村長会作成の「兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地に関する考證案」註21が添えられ、崇神天皇が四道将軍を山陰道に派遣した理由、四道将軍は、丹波比古多々須美地能宇斯王なりとの考証、車塚は丹波道主命の御陵墓なりとする理由を、さまざまな角度から考察をした。

発掘をおこなった1896（明治29）年以後、大正、そして太平洋戦争敗戦の1945（昭和20）年まで、車塚は四道将軍丹波道主命の御陵墓と一般的には理解されていた。そして、第２章第３節に記したように、

宮内庁は、1958（昭和33）年３月の書類によれば、車塚の被葬者名を「四道将軍である命」の可能性を捨ててはいない。

（３） 車塚は地方豪族の墓か

「敗戦による絶対主義的天皇制の崩壊と、それを歴史学の面でささえてきた皇国史観の破産とは、（略）古墳時代の科学的研究の自由をはじめて保障することになった」〔藤沢1966〕。戦前の歴史学を否定するかたちで、戦後の歴史学は出発した。そして、考古学は遺跡・遺構・遺物をとおして歴史の再構築を試みる研究方法を用いて、歩みはじめた。

戦前、車塚の図面や京都帝国大学に移置された出土遺物は、後藤守一氏の『日本考古学』〔後藤1927〕に「石棺・石槨図」の石槨の図や衝角付冑の写真[註22]が掲載される程度である。

末永雅雄氏（以下「末永氏」）は、京都帝国大学で研究していた関係から、身近にあった車塚の遺物、甲冑について1929（昭和４）年「衝角付冑の頂邊の附物及び鍬形に就いて」〔末永1929〕、1933（昭和８）年「七観古墳とその遺物」〔末永1933〕、1934（昭和９）年『日本上代の甲冑』〔末永1934〕といった著作を発表した。そして、1962（昭和37）年には「古墳の周庭帯と陪冢」〔末永1962〕に周庭帯論を展開し、1975（昭和50）年には『古墳の航空大観』〔末永1975〕にまとめた。車塚について、「和朝廷の政治力が地方への強力な伸展を物語る一つであろう。古墳は丹波道主命の墓といい伝えられ、『記・紀』（略）の生存年代と雲部車塚古墳の実年代とはズレがあるが、そうした政治上の業績をもつ人物の墓として、また裏日本と大和とをつなぐ要衝にあたる地理上の関係などから（略）、このあたりに居た豪族か政治上の任務をもって派遣されて来た人の墳墓であると見てよい。（略）武器類の多数な副葬は男性を思わせる。（略）この古墳は日本全体の古墳の地理的分布を考えるためにも、あるいはまた古墳と歴史上の人物との関係を観察するためにも重要な意義をもっている」とした。

1970（昭和45）年、篠山町立本郷大将記念図書館に勤務していた中山正二氏が、『雲部御陵墓参考地―車塚研究資料集―』[註23]を編集し、刊行した。車塚研究にかかわる既刊文献、『車塚一蒔』、『四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記』、『車塚の話』、『日本上代の甲冑』から、研究上必要な部分や参考となる箇所について抜粋し、当時の見取図、先学者の所見、そのほか参考資料が転載された。

この本は謄写版印刷、いわゆる孔版印刷で発行部数も限られたものであったが、戦後の車塚研究の扉を開かせる役割を果たした。その後、この本を参考に、遠藤順昭氏ほか『西山北古墳調査報告書』〔遠藤ほか1972〕の付載として『車塚一蒔』、「四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記」が転載された。そして、この報告書が車塚にかかわる資料の普遍化を担った。

こうして、車塚の文献が公にされることにより、描かれた絵図面などから発掘の状況を復元する研究が地元の研究会において取り組まれている。たとえば、朽木史郎氏「描かれ写した雲部車塚」・「続・描かれ写した雲部車塚」〔朽木1996 a/b〕、今井進氏「雲部車塚発掘100年・出土の甲冑について」〔今井1996〕などである。

一方、車塚という古墳にかかわる外部施設・内部施設・遺物、そして古墳そのものを対象とする研究が現在盛んにおこなわれている。個々の論文内容についての分析・考察は、第３・４章の各節に委ね、車塚について触れている研究論文などを少し列記しておきたい。

古墳の外部施設を研究対象とする、上田宏範氏『前方後円墳』〔上田1969〕・「前方後円墳における築造企画の展開―雲部車塚古墳と宣化陵―」〔上田1985〕、原島礼二氏ほか『巨大古墳と倭の五王』〔原島ほか

1981〕、石部正志氏・宮川徙氏「天皇陵と考古学」〔石部・宮川1986〕、上田哲也氏「兵庫に於ける周濠を備える前方後円墳の変遷」〔1985〕などがある。

内部施設・遺物を対象とする論文として、間壁忠彦氏･間壁葭子氏「長持形石棺」〔間壁･間壁1975･1976〕、間壁忠彦氏『石棺から古墳時代を考える』〔間壁1994〕、田中英夫氏「長持形石棺の再検討」〔田中 1975〕や、甲冑を扱った論文に、前出の末永雅雄氏『日本上代の甲冑』〔末永 1934〕、北野耕平氏「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」〔北野 1969〕、小林謙一氏「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上・下)」〔小林 1974 a/b〕、野上丈助氏「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点（上)」〔野上1975〕ほかがある。

また、1997（平成９）年、京都大学総合博物館において春季企画展『王者の武装―５世紀の金工技術―』〔京都大学総合博物館1997〕が開催され、京都大学に移置された車塚出土の遺物が展示された。それまで、図面・写真でしかみることができなかった車塚の遺物が公開された。

（４） 丹波道主命と車塚

戦前、郷土史家栗林貞清氏によって、車塚は四道将軍丹波道主命の墓だとする説が発表され、次第に流布し、定着した経緯については既に記述したところである。

丹波道主命について、『記・紀』には、次のように記している。

『古事記』和銅５(712)年

「崇神天皇　　…またこの御世に、大毘古命をば高志道に遣はし、その子建沼河別命をば、東の方十二道に遣はして、そのまつろはぬ人等を和平さしめたまひき。又日子坐命をば、旦波國に遣はして、玖賀耳之御笠を殺さしめたまひき…」

『日本書紀』巻第５　養老４(720)年

九月の丙午（九日）に、大彦命を北陸に遣わし、武渟川別を東海に遣わし、吉備津彦を西道に遣わし、丹波道主命を丹波に遣わした。そして、詔して、「もし教えを受けない者があれば、ただちに戦争を起こして討伐せよ」と仰せられた。

換言すると、崇神天皇が北陸・東海・丹波・吉備に、４名の将軍を派遣して、討伐・平定を進めたことを物語る地方派遣説話である。

しかし、この説話の前提となる崇神天皇の存在について、戦後の研究成果によると、井上光貞氏は、『記・紀』に記された皇室の祖先について、初代の神武天皇から第９代の開化天皇までは神話上の人物であり実在しない、第10代崇神天皇、第11代垂仁天皇、第12代景行天皇は実在する可能性がある、そして第13代成務天皇・第14代仲哀天皇はほとんど実存性がなく、４世紀後半の第15代応神天皇以後、確実に実在する天皇であると推測している〔井上 1965〕。

そうすると、応神天皇以前、崇神・垂仁・景行天皇の３名の在位年数を20年と仮定すると、崇神天皇は４世紀初頭あるいは前半に在位年代を求められる〔井上編 1983〕。

次に考古学の立場からみると、車塚は、前期古墳の存在が未確認である篠山盆地において、突如出現した古墳と現在いいあらわすことができる。第２章第２節ほかで記述した車塚の特徴は、１）盾形の周濠をもつ前方後円墳、２）復元された墳丘の長さ158ｍは全国第59位、丹波・丹後の両旧国内では第３位である、３）陪塚はくびれ部の南北に対称に配する、４）墳丘は３段築成、円筒埴輪や形象埴輪が第２段平坦面から出土、５）後円部中央よりやや南に偏して割石積みの竪穴式石槨があり、後円部北側にも竪穴式石槨が存在する可能性を有する、６）竪穴式石槨内には長持形石棺を安置し、側壁四面に武器

を掛け、槨内に武具を副葬している、７）冑の一つに鉢の前面に袋状の突起部を鋲留した三角板鋲留異形衝角付冑があり、ほかに例がない。

そして、車塚の築造年代は、最近の研究によると、埴輪、刀剣甲冑などの武器・武具、長持形石棺などから、５世紀中頃〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか2000〕、５世紀第Ⅱ四半期〔京都大学総合博物館1997〕と推定されている。

崇神天皇を仮に実在する天皇と考え、説話も事実とするならば、その在位年代を４世紀前半とすると、崇神天皇の在位期間と車塚の被葬者の在位期間は約100年の開きがあり、車塚を畿内勢力から派遣された将軍丹波道主命の墓とすることはできない。

しかし、車塚の諸特徴は畿内の大型古墳と共通するきわめて画一的な内容をもち、墓制をともにする紐帯関係にあったと理解される。中でも、大王の棺と呼ばれる長持形石棺を用いる被葬者は、「大王をはじめとするこの地域（筆者註：畿内）の有力首長やそれと親密な関係にある首長」〔和田2002〕と思われる。

いいかえると、車塚は畿内を中心にして展開される政治勢力の連合体と密接な関係を有する古墳であるといえる。今後、畿内の政治勢力と地方豪族との具体的な関係について明らかにしていくことが求められる。

四道将軍の説話は、車塚築造以前に、日本列島を舞台にして展開された征服譚であり、象徴的にあらわしているものであろう。雄略天皇を示す「獲加多支鹵（ワカタケル）大王」名がある文字資料、埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳出土の鉄剣や熊本県和水町江田船山古墳出土の大刀の銘文によると、５世紀末には東は埼玉県から西は熊本県におよぶ範囲に、畿内の政治勢力と地方豪族とが職掌にもとづき、緊密な関係をもった政治的社会が存在したことが明らかとなった。このような例から、今後絶対年代を含む文字資料が発見され、天皇陵古墳・陵墓参考地に治定された古墳を含む古墳の発掘調査によって、当然考古学研究は進展していくものである。雲部車塚古墳と丹波道主命、両者の間には大きな隔たりがある。この溝を埋める解答を求めていかねばならない。

〈註〉

1　福原潜次郎氏は会下山人と号する。『多紀郷土史話』を1934（昭和９）年10月に刊行。

2　奥田常造氏は「楽々斉宗竹」と号するが、通名「楽々斉」である。『多紀郷土史考』上下２巻を1958（昭和33）年11月に刊行。

3　「多紀史蹟研究会」1934（昭和９）年８月、楽々斉が中心となって設立、顧問は福原会下山人である。1936（昭和11）年１月、月刊誌『会報』を創刊、1939（昭和14）年11月に通巻42号をもって廃刊。

4　太田毎資・奈良正質（編）『篠山領地誌（一名貞享記）』1687（貞享４）年。

5　永戸半兵衛貞著『丹波志』1794（寛政６）年。

6　松崎祐之『篠山封彊誌』1712（正徳２）年。

7　大石定質『多紀郡明細記』1853（嘉永６）年。

8　村雲は篠山市の東北、篠山川の上流域に位置する。旧村雲村は、莚見、山田、垂水、小田中、草の上、塩岡、細工所、井串、貝田、松が鼻、向井、栃梨、本荘（東本荘・西本荘）、春日江、倉谷、泉の集落がある。

9　第２章第２節、註11参照。

10　第２章第２節、註12参照。

11　栗林貞清氏は1861（文久元）年、篠山藩士の家に生まれ、養父市池田草庵塾（青谿書院）に学んだ後、小学校教員となった。『丹南叢話』を1897（明治30）年に刊行。

12　栗林貞清談『車塚の話』1897（明治30）年８月。

13　栗林貞清談『車塚の話』1897（明治30）年８月。

14　『日本書紀』巻５、崇神天皇の条。

15　いごり塚古墳のこと。県守字山谷、春日神社境内に所在する。前方部を北東に向けた全長 22 mの前方後円墳、横穴式石室を有する。
16　「四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記」 1908 （明治 41 ）年６月、『車塚記』に所収。
　　雲部村役場に勤めていた高家正一氏が、木戸村長から車塚の顛末を聞き、書き記したもの。
17　木戸勇助『車塚一蒔』 1910 （明治 43 ）年 10 月、 pp.227-228 。
18　小倉瀧蔵氏復命書（竹野郡役所文書「明治四十三年古墳調査一件」京都府庁文書）、〔橋本 2008 〕に所収。
19　木戸勇助『車塚一蒔』 1910 （明治 43 ）年 10 月、 p.127 。
20　「丹波道主命奉斎官社地ノ請願書」 1923 （大正 12 ）年３月、〔橋本 2008 〕に所収。
21　多紀史蹟研究会『兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』 1935 （昭和 10 ）年。
22　車塚の石槨の図が誤って「和泉国泉北郡舳松村仁徳陵前方部発掘」と記されている。
23　中山正二『雲部御陵墓参考地―車塚研究資料―』 1970 （昭和 45 ）年３月。

〈参考文献〉

池田正男　2003 「 20 世紀における篠山盆地の考古学史」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第３号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　pp.99 - 116
石部正志・宮川　徙　1986 「「天皇陵」と考古学」『岩波講座 日本考古学』 7 現代と考古学　岩波書店　pp.233-270
井上光貞　1965 『日本の歴史』 1 神話から歴史へ　中央公論社
井上光貞（編）　1983 『日本書紀』日本の名著１　中央公論社
今井　進　1996 「雲部車塚発掘 100 年・出土の甲冑について」『篠山文華』第187号　篠山文華学会　pp.180-182
上田哲也　1985 「兵庫に於ける周濠を備える前方後円墳の変遷」『兵庫史の研究』松岡秀夫傘寿記念論文集　神戸新聞出版センター　pp.263-285
上田宏範　1969 『前方後円墳』 学生社
上田宏範　1985 「前方後円墳における築造企画の展開―雲部車塚古墳と宣化陵―」『兵庫史の研究』松岡秀夫傘寿記念論文集　神戸新聞出版センター　pp.287-312
北野耕平　1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第54巻第４号　日本考古学会　pp. 1-20
京都大学総合博物館　1997 『王者の武装― 5 世紀の金工技術―』京都大学総合博物館春季企画展展示図録　京都大学総合博物館
朽木史郎　1996a「描かれ写した雲部車塚」『篠山文華』第 181 号　篠山文華学会　pp. 122-126
朽木史郎　1996b「続・描かれ写した雲部車塚」『篠山文華』第 183 号　篠山文華学会　pp. 141-144
小林謙一　1974a「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』第20巻第４号　考古学研究会　pp. 48-68
小林謙一　1974b「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（下）」『考古学研究』第21巻第２号　考古学研究会　pp. 37-49
駒井　功・遠藤順昭・山本　昭　1972 『西山北古墳調査報告書』多紀郡文化財調査報告書第１冊　多紀郡教育事務組合教育委員会
後藤守一　1927 『日本考古学』 四海書房
末永雅雄　1929 「衝角付冑の頂邊の附物及鍬形に就いて」『考古学雑誌』第 19 巻第７号　聚精堂　pp.15 - 20
末永雅雄　1933 「七観古墳とその遺物」『考古学雑誌』第 23 巻第５号　考古学会　pp. 21- 36
末永雅雄　1934 『日本上代の甲冑』 岡書院
末永雅雄　1962 「古墳の周庭帯と陪冢」『書陵部紀要』第13号　宮内庁書陵部　pp. 1-42
末永雅雄　1975 『古墳の航空大観』 朝日新聞社
田中英夫　1975 「長持形石棺の再検討」『古代学研究』第 77 号　古代学研究会　pp. 17 - 29
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学・東京新聞　2000 『大古墳展 ヤマト王権と古墳の鏡』 東京新聞
野上丈助　1975 「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点（上）」『考古学研究』第21巻第４号　考古学研究会　pp.34 - 58 , 83
橋本勝行　2008 「明治～大正期の史蹟保護と活用」『遺跡の保存整備と活用』第 25 回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流会 両丹側資料集　両丹考古学研究会　pp. 3 - 4
原島礼二・石部正志・今井　堯・川口勝康　1981 『巨大古墳と倭の五王』　青木書店
藤沢長治　1966 「古墳時代研究のあゆみ」『日本の考古学』Ⅵ 古墳時代 上　河出書房新社　pp.26-38
間壁忠彦・間壁葭子　1975 「長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』第 11 号　倉敷考古館　pp.1-41
間壁忠彦・間壁葭子　1976 「「長持形石棺」補遺」『倉敷考古館研究集報』第 12 号　倉敷考古館　pp.80-82

間壁忠彦　1994『石棺から古墳時代を考える 型と材質が表わす勢力分布』同朋舎出版
八木奘三郎　1901「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」『東京人類學會雑誌』第17巻第189号　東京人類学会
pp. 93-98
和田晴吾　2002「長持形石棺」『日本考古学事典』三省堂　pp.670-671